

好奇心

新国 勇

好奇心、もの好き、のぞっ込み根性、言い方はいろいろありますが、学ぶ会の方々には、それらのことばが当てはまる人が多いと思っています。なんでも知りたがる、おもしろがる、興味深々、そんな楽しみを少しでもまわりの人にも知ってもらいたい。それが学ぶ会の活動です。

高校生のとき、通学路の街路樹で、キリキリ、キリキリ、ピーンと鳴く鳥が、わからず気になっていました。それが、カワラヒワだとわかったとき、やっとわかった！と感動した覚えがあります。大学に入っても、キャンパス内に咲くキツネノボタンやニワゼキショウなど知らない草を見つけて調べては、名前を知る楽しみを覚えました。それ以降、目につく草木鳥虫魚をなんでも調べるくせがつきました。山道を歩いていて、知らない草木や聞いたことがない鳥の声が聞こえたときも興奮してしまいます。そして、その名前や生態がわかったとき、胸のつかえ

がおりたようで安心します。知ることは喜びです。

ひとりで知り合いのいない町に行ってもおもしろくないでしょう。しかし、はじめていく町で、前からよく知っている仲間と出会えたら、うれしくなります。なつかしく感じたり、意外なことを発見したりするかもしれません。植物や鳥を知ること、それと同じです。それが自然と友だちになる秘訣だと思っています。

好奇心、なんでもおもしろがる気持ち。これがあれば退屈しません。もの好きな人をいっぱい増やしましょう。



〈そこで質問〉

＊このサンショウウオは何サンショウウオでしょう？ ちょっと見慣れない色をしていますね。採取地は旅行村、採集者は我らが稲葉先生。夜、道を歩いているのを運悪く見つかってしまったらしいのです。

(11/2 ML より・勇)

＊答は裏面に

■ 活 動 予 定

＊第2回只見の自然を学ぼう会（講演会）
「希少樹種の保全とは何か？～ハナノキからユビソヤナギへ～」（詳細はチラシ参照）

日時／2月1日(日)14:00～15:30・会場／朝日地区センター2階大ホール・講師／鈴木和次郎氏

＊学ぶ会「旧暦新年会」

日時／2月1日(日)18時～・場所／ふる里
・会費／4千円

参加希望者は1月28日までに事務局・和子さんに
電話・FAXまたはメールでお申し込みください。

＊学ぶ会「雪まつり」行事

2月14日（土）～15日（日）に開催される『第37回只見ふるさとの雪まつり』に合せて、学ぶ

会の雪まつり行事を企画。詳細は後日、MLでご案内しますが、参加希望者は事務局まで電話、メール等でお問い合わせください。

予定として、2月15日（日）午前中、館ノ川の丸山で雪遊び後、只見温泉保養センターで親睦会

＊雪遊び（3月、月田農園訪問予定）

＊ユビソヤナギ＆春花観察会（4月中旬）

＊バードウォッチング＆山野草観察会（5月2週末、寄岩＆蒲生）

＊総会＆懇親会（5月下旬～6月上旬土曜夜の予定）

＊地元ガイドによる蒲生川ブナ林散策（総会翌日予定）

北限の自生地を行く ——ユビソヤナギ後日談

鈴木和次郎（独立行政法人 森林総合研究所 研究員・只見の自然に学ぶ会顧問）

次々と発見された ユビソヤナギの新産地

2004 年、只見町の伊南川の河原で、学ぶ会の佐藤潤子さん、熊倉恵子さんらと偶然にもユビソヤナギに出くわした時、今後とも各地で新産地の発見が続くのではないかと強く予感した。その理由は、ユビソヤナギが一見すると形態的にも似たオノエヤナギに紛れ込み、見逃されている可能性が大だということであった。実際、私自身、その前年、晩秋



写真1：生保内川の自生地



写真2：大鳥川のユビソヤナギ集団

とはいえ（珍しい雪景色だったが）、近くの黒谷川合流部で新国勇さんらとヤナギ林を観察していたのだが、ユビソヤナギの存在に全く気づかなかった。本当に紛らわしいのである。伊南川でのユビソヤナギの発見は、もう一つ重要な意味を持っていた。それは、伊南川が只見川の支流で、只見川はやがて阿賀野川に合流し、日本海に流れ込むという事実である。ユビソヤナギは、1972 年の群馬県旧水上町、谷川岳直下を流れる湯檜曾川で初めて発見されて以来、ほぼ 10 年おきに、宮城県の鳴瀬川源流部、江合川上流、そして岩手県和賀川上流と北関東から東北にかけ脊梁山脈直下の太平洋側、大規模河川の上流部で新産地が見つかってきた。すなわち、只見川流域でのユビソヤナギの発見は、日本海側におけるユビソヤナギの分布の可能性を強く示唆したのである。実際、脊梁山脈の日本海側の分布も報告されていた。秋田県の生保内川である。この自生地については、発見者の岩手県和賀町の瀬川強さんの案内で、同僚の菊地賢（森林総研）ともども訪れた。しかし、かの自生地は盛岡と秋田をつなぐ主要国道沿いの小沢に分布し、個体数も 10 個体以下で、しかも全て雄株という状況であった（写真1）。生保内川をはじめ周辺の河川についても調査したが、他にユビソヤナギの痕跡はなかった。結論として、道路工事に



写真3：朝日連峰・荒川の上流部の自生地

ともなう岩手からの移入の可能性大とした。やはり、日本海側にユビソヤナギは分布しないのか？ところが、同僚の菊地君が、ユビソヤナギとは別の仕事で、山形県東大島川で一大自生地を発見したとの報告が飛び込んできた。場所は、朝日連峰の北側（鶴岡側）で、溪流釣りや登山で人通りも多い大島川、そこに大集団がありながら見過ごされてきた事実正直、ショックを受けた（写真2）。これもユビソヤナギの知名度の低さ、ヤナギ科植物の同定の難しさが関係しているものと思われた。その後、菊地君は周辺地域の河川の調査に乗り出し、朝日連峰の南側、荒川の上流部（写真3）。そして鳥海山麓で最上川の一支流、銅山川でも自生地を発見している。これで、太平洋側に限られるとしてきたユビソヤナギの分布は大きく塗り替えられた。

秋田県玉川源流部に入る

2007年、菊地君は、さらにユビソヤナギの自生地探索の範囲を北東北にまで広げた。しかし、一番期待した本州最北部、青森県の下北半島では分布が確認されなかった。そして、北東北のもう一箇所の有力な候補地、米代川水系でもユビソヤナギは発見されなかった。ところが可能性は低いと考えられていた雄物川水系、玉川で発見された。この辺は、菊地君の執念深さというか、好奇心のなせる業ということが出来るかもしれない。なぜ、玉川上流部を期待薄としたのか？それは、これまで、ユビソヤナギの自生地がことごとく花崗岩地帯にあったためである。玉川上流域は、十和田八幡平国立公園内にあり、いわば火山地帯のど真ん中を流れる河川である。これまでの常識からは大きく外れていたのである。ユビソヤナギの個体を初めて確認した場所は、超酸性の温泉で有名な玉川温泉の近くである。そこで、菊地君は歩道すら整備されていない玉川本流を3-4時間さかのぼって、ユビソヤナギを調査し、時間切れで引き返している。そこで、この夏、改めて玉川源流部のユビソヤナギの調査を行い、この流域のユビソヤナギ集団の全貌を明らかにしようと意気込んで出かけたのである。地形図などから見ても、菊地君が到達できなかった大深沢合流部の上に広い谷底氾濫原が広がり、ユビソヤナギの格好の生育立地と見られた。

玉川源流部は、十和田八幡平国立公園内にあるが、自然度の高い天然林が残されているということで、隣接する岩手川の葛根田川源流部とともに、森林生



写真4：玉川源流部の樹海

態系保護地域に指定されている。その立ち入り、利用は、原則的に厳しい制限が設けられている上、アクセスが困難と考えていた。ところが、詳しい地図を見ると、かなり奥まで、治山工事用の林道が入っていることが判った。そこで、森林管理署に入林許可を取るついでに問い合わせしてみると、途中まで林道が使い、車で入れることが判った。ユビソヤナギの一大自生地の発見を夢見て、あわよくば、近縁種で本州には上高地にしか分布しないエゾヤナギとの遭遇を期待し、菊地君と新幹線で盛岡に向かう。盛岡駅前、夏祭り真っ只中で、「さんさ踊り」に迎えられた。この探索には盛岡にある森林総研東北支所の星野君が同行することになっており、車で迎えに来てくれた。私たち3人は、ひとまず前泊する玉川本流部分岐に近い八幡平の後生掛温泉に向かった。途中、八幡平のアスピーテラインから玉川源流部を望み見た（写真4）。圧倒的な樹海で、目指す大深沢の氾濫原が見える。果たして、明日は、あの場所にたどり着けるのか？後生掛温泉は夏休みだというのに、ひっそりしていた。度重なる地震災害や大雨で、観光客の出足は鈍いのだとか。夜、地図を広げて翌日の行動を詳しく検討した。とにかく、初めての地域だし、山が深く、はっきりとした道もない。

ユビソヤナギの北限の自生地はいかに？

早朝、車で後生掛温泉を出発。国道をくだり、玉川分岐から林道に入る。この林道を10キロほど行くと、地形図によれば八幡平から本流に下る登山道に出くわすはず。しかし、実際、この登山道が利用

されているとの話は全く聞かない。かなり整備された林道を順調に進む。この流域は、かつて生保内営林署がブナ林の伐採を大々的に行っていた場所で、最初は成績の芳しくないスギの人工林が続き、次にカラマツに人工林が現れる。しかし、すぐに疎林化したブナ林になる。皆伐母樹保残による天然更新施業地である。その伐採率も段々低くなるが天然林と違って、明るくなった林床にはネマガリダケ（チマキザサ）が繁茂している。GPS にしたがって、歩道と林道の交差する地点にたどり着く。しかし、歩道の明瞭な痕跡はない。車を降りて調査道具を持ち、身支度を整えて、いざ本流に向けて出発。かすかに残る道を下り始めるが、なぜか谷に下る気配はない。そして、いつの間にか、道は消える。こんなことを繰り返して、この道らしきものが実は伐採時のトラクター道であることに気づき、次はササの薄い、伐採を免れた林分をたどって、本流に下りることとした。同行の二人は自信無げなので、私が先導することにする。30 分ほど、ビニールテープでマーキングしながら斜面を下ると何となく、遠くに白ペン



写真5：大深沢出会い付近の河原



写真6：大深沢の氾濫原

キでマーキングしたブナの立木が目に入った。小谷を超えて、そこに行ってみると、何と立派な歩道があるではないか！そして、その木杭には、ブナの遺伝子保護林とある。歩道に沿ってさらに下ると、急勾配の先に玉川本流が見えてきた。急斜面を下りきったところで、今度は何と林道が本流沿いにあるではないか。しかも、真新しいタイヤの跡が！森林生態系保護地域の核心部に林道はないだろう！？帰りの坂道を考えて、一気に疲れが出た。車で来れたのだ。こうした情報は一切、森林管理署から知らされなかった。ともあれ、私たちは玉川本流、しかも菊地君が到達できなかった大深沢との出会い付近にまで来ている。河原に出ると、火山地帯を流れる河川特有の水の濁りとかすかな硫黄のにおいが立ち込める。しかし、河岸段丘は高い位置にあり、ブナ林が迫る（写真5）。ヤナギ類の生育する環境は限られている。事実、ユビソヤナギは下流部に小集団が分布するのみであった。とりあえず、本命の大深沢の広い氾濫原を目指すことにした。本流沿いに工事用車両の通れる道があり、また歩道がきちんと整備されている。大深沢にある取水用ダムの管理歩道と記され、途中に管理小屋まであった。大深沢の氾濫原は、ダムの上にあった。確かに幅 100 ～ 200 m の氾濫原はヤナギ科植物にとって好適な生育立地ではあるが、ユビソヤナギは全く見つからなかった。あるのはドロノキとオオバヤナギ、そしてシロヤナギの大木、オノエヤナギを交えた小群落のみであった（写真6）。一大自生地は存在しなかったのである。

仕方なしに、出発点に戻り、下流に向かって、今回使えなかった林道を下り、前回、菊地君が最終的に到達した地点に戻り、そこにあったユビソヤナギを含むヤナギ林の林分調査に取り掛かった（写真



写真7：玉川本流のヤナギ集団

7)。ヤナギ林の群集組成は、ほぼ只見地域のものと同じで、ユビソヤナギのほか、オノエヤナギ、シロヤナギ、ヤマハンノキを交える若い林である。菊地君によれば、この流域のユビソヤナギは個体サイズも小さく、個体数もさほど多くはなかったという。しかし、確かに、この火山地帯のど真ん中を流れる玉川の地にユビソヤナギは分布していた。

解き明かされない謎

菊地君が行っている DNA を使った遺伝解析によるとユビソヤナギは、北海道からサハリン、シベリアに分布するエゾヤナギに系統的に極めて近いという。彼の推論によれば、幾たびかあった氷河期に北海道から本州に進出したエゾヤナギが、いずれかのヤナギと交雑し、形成された雑種を起源とする樹種ではないかとのことである。最終氷期には、北関東から東北にかけて平野部に広く分布していたものが、その後1万年前に始まる温暖化の中で、次第に生育地を失い、大規模河川上流に、断片化して残ったものと考えられる。しかし、それにしては、エゾヤナギが上高地にだけしか残らなかったのはなぜ

か？ユビソヤナギとエゾヤナギは明らかに分布域をことにしているのはなぜか？さらに、これほど人くさい伊南川流域にユビソヤナギが広い分布域を維持しているのはなぜか？たかだか1万年の地史的な変化の中で、何が起こったのかは明らかではない。只見の自然に学ぶ会の人たちの中からも、次々と発見されるユビソヤナギの自生地、只見のユビソヤナギの価値が下がるのではないかと危惧する声も聞く。実際、只見のユビソヤナギの実態が明らかにされる中で、環境省のレッドデータリストはこの種をIbからIIへとランクを下げた。しかし、本来、これは種の保全という立場からすれば歓迎すべきことである。また、新たな自生地の発見は、ユビソヤナギの地理的分布やその起源に迫る遺伝的解析に重要な資料を提供する。

只見川流域の自生地は、その規模や個体数から言って、希少樹種ユビソヤナギの保全・保護を図る上で、最も中核的な存在である。また、黒谷川流域や伊南川の中州に存在するユビソヤナギ林は極めて自然度が高く、群落として守ってゆく価値がある。地域の貴重な財産であるユビソヤナギをぜひとも大事にしてもらいたいと願っています。

われらが
顧問 **和次郎** ワールド
Vol.2

ヤマグルマ

鈴木和次郎（独立行政法人 森林総合研究所 研究員・只見の自然に学ぶ会顧問）

1科1属1種の変わりもの

これまで、幾度となく只見を訪れて、その都度、真近に迫る雪食崩壊地の圧倒的な景観に驚かされた。それはまるでノルウエーやニュージーランド南島のフィヨルド地方の光景を想起させ、それがたかだか、数100mから1000m程度の山地帯に見られることが驚きなのである。まさに日本屈指の豪雪地帯のなせる業なのだろう。しかし、これまで、こうした景観を下から見上げるだけで、空中写真を除けば、高みに立って、眼下を望む機会が持てなかった。

今回、只見地域、会津朝日岳周辺における微地形

解析に基づく植生図作成の自動化を本格化させるに当たって、稜線部の植生を直に見ておく必要に迫られ、朝日岳登山道沿いを踏査する機会を持った。山頂を極める目的ではなかったため、時間の関係で熊の平で引き返したが、稜線部の植生の概要をつかむことが出来た（写真1）。それは、文献資料では得られない情報を得ることにつながる。このこととは別に、今回の山行きで稜線部で見たヤマグルマに大変興味をそそられた。

ヤマグルマは、1科1属1種で、ヤマグルマ科ヤマグルマ属の常緑広葉樹である。日本をはじめ朝鮮半島、台湾に分布し、日本では山形県を北限とし、南は屋久島まで分布する。一般に広葉樹は通導組織として導管を、針葉樹は仮導管を持つが、ヤマグル

マは日本に分布する広葉樹の中で、唯一仮導管を持ち、原始的な広葉樹と呼ばれている。ヤマグルマの名前の由来は、葉が枝先に車輪状に開出することからきていると言う（写真2）。ヤマグルマは、直径1 m、最大樹高が20 mにまで成長できる高木性樹木であるが、そうしたヤマグルマは温暖多雨の屋久島などでしか見られない。分布の北限地域では見られるヤマグルマは、通常は数mの低木でしかない。実際、只見町の沢筋で見かけるヤマグルマも、2～3 mで、なるほど只見にもヤマグルマが分布しているのか程度の認識しか持たなかった。ところが、驚いたことに、朝日岳の登山道、「人見ノ松」より先の稜線部の低木林の中には矮性化したヤマグルマが多数見られ、さらに「叶ノ高手」付近の北側斜面には、ヤマグルマの林分まで存在した（写真3）。そして、さらに驚かされたのは、これらヤマグルマが直立し、中にはかなり大きな個体まで見られたことである（写真4）。この個体のサイズは是非とも調べてみたいものである。岩石地で、風衝の立地に樹高は低いとはいえ、常緑広葉樹林が成立するという

ものの不思議なものである。では、なぜ、このようなことが起こってしまうのだろうか？ここからは憶測の域を出ない眉唾の話なのだが……。

土壌も嫌う？ ヤマグルマ

ヤマグルマは、種子発芽以降の成育過程で、明るい光環境を求めるが、一方、実生は土壌に住む菌類に対する抵抗性が低いため、生存率が極めて低い。唯一、生存が可能なのは、土壌がない場所、すなわち、岩石上か、倒木の上である。屋久島の場合は、自然に倒れた樹木の上か、屋久スギの切り株上である（写真5）。そこには、確かに土壌はないが、やがて朽ち果てる死んだ材は、成長に十分な養分を供給できるのかもしれない。結果、ヤマグルマは長らく、親木を枯らし成長する寄生樹木の代表格のように言われてきたが、そのようなことはないというのが今日の定説である。ヤマグルマのもう一つの成育場所は岩石地である。只見地域には雪食崩壊地が広範囲に広がり、ヤマグルマの成育立地は多く存在す



上より写真1・写真2



上より写真3・写真4

る。しかし、ここには競争者もない代わりに、地味豊かな土壌が存在しない。結果として、ヤマグルマは存在できても、大きく成長することはない。ではなぜ、只見のヤマグルマは比較的大きく成長できるのか？おそらくは、競争すべき他の植物樹木が存在せず、尾根部という開放的な光環境の下で、水耕栽培に近い環境が生まれているのではないだろうか？この光環境が谷壁斜面に張り付くヤマグルマとは違うのだろう。あるいは、尾根部の薄い土壌には、ヤマグルマの実生の更新を妨げる土壌菌が存在しないのかもしれない。それにしても、豪雪地帯に常緑広葉樹林というのは、奇怪である。他の樹木との競争を回避するため、こうした樹木の生育不適地をたくみに利用して生活の場にする例は他にも見られ、この地域では尾根部のキタゴヨウやネズコが代表的な樹木である。両種はまた、高層湿原にも侵入し、成育の場としている。この過湿と乾燥、泥炭地と岩石地という両極端を利用する生存のための戦略も面白いが、ヤマグルマは、さらに輪をかけて理解不能である。温暖から寒冷、多雨から多雪の環境に適応し、高木から低木へと姿を自在に変えることが出来るヤマグルマは、系統的に極めて古い種群であるがゆえに、原始的な生命力を持ち続けているのかもしれない。

鳥糞（トリモチ）とヤマグルマ

ところで、奥会津地方は、ヤマグルマが多く成育するが故、これが盛んに利用されてきた歴史を持つという。何に使ったのか？鳥糞（トリモチ）の生産である。今時の若い人たちは知らないだろうが、私の子供頃（昭和30年代）、田舎の子供たちは、トリモチを使い、盛んにメジロやウグイス、シジュウカラなどの野鳥を獲った。どのようにするのか？おとりを入れた鳥籠を山に持ち込み、木の枝にかけ、周囲にトリモチを巻いた止まり木を設置する。この枝として、通直で柔軟性に富む梅の当年枝が使われた。しばし、物陰に潜んでいるとおとりの鳥が鳴き、それに引き寄せられるかたちで、野鳥が周囲に寄ってきて、トリモチの着いた枝に止まり、捕まえるという寸法である。これは主に鳥の繁殖期に行うのだが、メジロは結構いい値段で取引された。もちろん、当時も密猟に違いはなかったのだが、私の田舎では大目に見られていた。野鳥の中で一番厄介なのはヤマグラで、こいつは他の野鳥に比べ図体が大きいばかりでなく、極めて攻撃的で、おとりにちょっかい

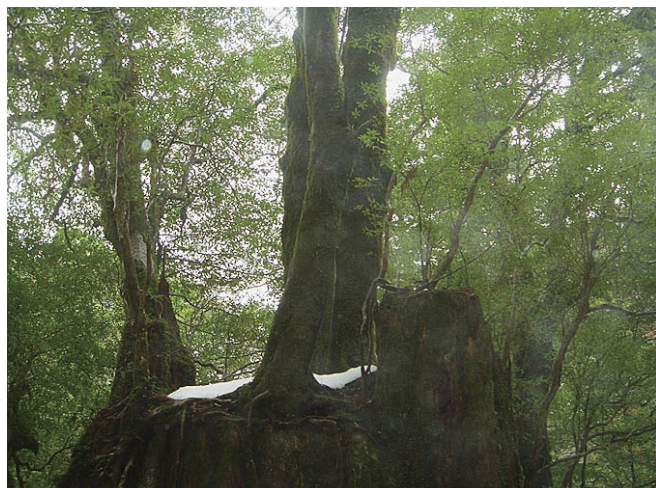


写真5

を出しにくるばかりでなく、トリモチにかかっても簡単に降参しない！暴れまわった挙句、結局逃げるのだが、この際、トリモチをグジャグジャにしてしまう。その結果、トリモチを取り替えねばならず、そのトリモチを処理するのに、衣服につけることになり、それが簡単に取れない。その当時の男の子の服の袖には、取りきれないトリモチが引っ付いたままになっているのを良く見かけた。そんなトリモチであるが、主にモチノキやクロガネモチ、ソヨゴなどモチノキ属植物の樹皮から作られたが、ヤマグルマもその材料になっていた。どのように作られるのだろうか？ものの本によれば、春から初夏にかけて、これら樹木の樹皮をはぎ、目の粗い布にいれ、秋まで水にさらす。その後繊維質がなくなるまで白で細かく碎き、不純物を取り除いてトリモチとなるという。トリモチの成分はワックスエステルつまり蠟だそう。ちなみにトリモチは水につけておくと粘着性がなくなる。トリモチは食用に鳥を捕獲するほか、観賞用の鳥の捕獲、そして虫取りなどに使われたが、現在はあまりその存在を聞かない。少なくともトリモチを作るためにヤマグルマの樹皮を採取することはなくなったようだ。それにしても、トリモチを製作するために、只見地域のヤマグルマがどれほど伐採されたのか？どれほど大きなヤマグルマが存在したのか？是非とも知りたいものである。

鈴木和次郎

独立行政法人・森林総合研究所（茨城県つくば市）研究員。専門は森林生態学、造林学。『水辺林管理の手引き』（日本林業調査会）、『溪流生態砂防学』（東大出版会）、『環境修復のための生態工学』（講談社）など、共著や論文多数。只見の自然に学ぶ会顧問。

■ 活動報告 (※は「学ぶ会メーリングリストより」に詳しい内容報告)

＊只見の自然を学ぶ講演会「只見の自然再発見！
ぬるぬる大好き 稲葉ワールド～イワナもヘビも
カエルも大集合～」(8/29 (金) 19:00～20:
30・朝日地区センター) ※

＊8月定例会(8/29 (金) 講演会終了後／「もとじ」
で開催) ホームページと学ぶ会通信の内容検討、
蜚情報の中間報告等を行なう

＊9月定例会(9/6 (土)／事務局・渡部宅で／7名
参加) 9月・10月の行事等について確認。学ぶ会
は楽しみながらをモットーに、只見の自然からお
宝探して学ぶべーと立ち上げた会なので、もっと
気軽に参加できる雰囲気作りも必要と話し合う

＊只見川上流ユビソヤナギ調査(9/20 (土)～21
(日)／3名参加) ※

＊入叶津・きのこの勉強会－地元ガイドシリーズ・
叶津編(10/4 (土)／9名参加) ※

＊10月定例会(10/4 (土) きのこ勉強会終了後／
「八十里庵」で開催) 11月9日の布沢・恵みの
森ツアーについて内容確認

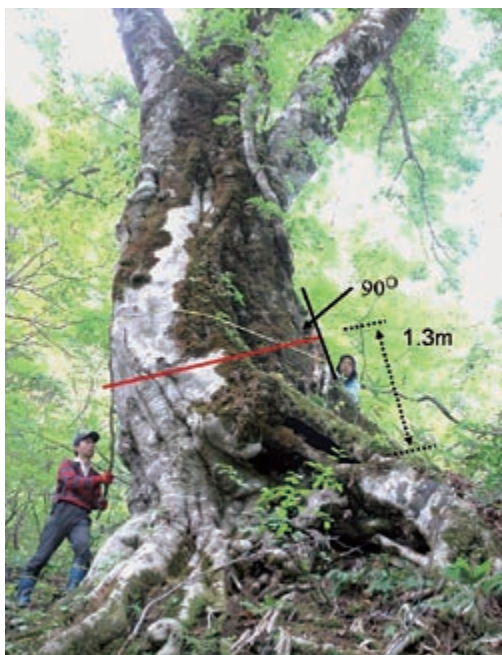
＊恵みの森ツアー＝地元のガイドシリーズ・布沢編
(11/9 (日)／10名参加) ※

＊忘年会(11/29 (土)／「もとじ」で／15名参加)

＊水鳥観察会(1/12 (月・祝)／滝湖・只見湖／
15名参加) ※

＊1月定例会(1/12 (月) 水鳥観察会終了後／只
見スキー場レストハウス／10名参加) 和次郎さ
ん講演会関連と雪まつり行事について打合せ

■ トピックス ①



＊塩沢の大ブナ

和次郎さん作『正しい樹木の測り方』です。

なんだったってあ～、塩沢のブナはでっけ～なあ！程度に、地
味に楽しみましょう。(10/20 ML より・聖)

樹木の正しい測り方(胸高直径)

- 斜面上部(山側)、樹幹中央部に立つ
- 地際から1.3mの位置にマークする
- 樹幹の表面に直角になるようにメジャーを巻き、周囲長を計測する
- 樹幹表面の凹凸をなぞることはしない
- 明らかな瘤などは避け、上部で計測する
- 無理にサイズを大きくしない。最小サイズであれば、皆納得する
- 合体木か否か、について確認する
- 樹高も測るように

■ トピックス ②

＊勇さん赤坂憲雄館長と県立博物館で講演
〈館長サタデープロジェクト 自然との共生－博物
館に求められるもの4〉「只見 ブナの森を愛す」
と題して、学ぶ会の新国勇代表が、福島県立博物

館で講演します。

日時：2/21 (土) 13:30～15:00

詳しくは、県立博物館HP <http://www.general-museum.fks.ed.jp/moyoshi/museum.html#10>

■編集室から

4号(’08.8.27発行)から4ヶ月半のご無沙汰です。
ホテルや夏の大三角、魚とり…から季節はめぐり、
学ぶ会通信5号は雪の中からお送りします。

個人的な事情で発行が大きく遅れてしまいましたが、もう少し復調してから、とのんびり構えていた
ら、S子氏に仕切られて何とかできました。(楓)

表紙の答：クロサンショウウオ

■ 学ぶ会メーリングリストより

*稲葉ワールド全開! 報告

8月29日、第1回「只見の自然を学ぶ会」開催は予告通り。参加者は大人23名、子ども12名、計35名。標本、レプリカ、スライドなどを見ながらのお話、1時間半。子どもが多いのにも関わらず、誰も飽きたりせず、熱気みなぎる会場。蛇、蛙、魚、貝などのお話の面白さもさることながら、稲葉さんの生態にも爆笑の渦! 大変盛り上がりました。

今回の目玉は、前の晩、稲葉さんが蒲生でタカチホヘビを確認したこと。これで只見は日本（沖縄以外）のヘビ全8種類制覇! 県内では他に南相馬市がコンプリート。それって、稲葉さんのテリトリーだからってだけでは……いえいえ、すごいことなんですってよ!!

8月31日の「親子で伊南川あそび」（注：おやじの会・南郷&伊南川げんき会主催）は、大人20名、子ども16名、計36名参加。お天気はよかったのですが、前日までの豪雨で伊南川は増水&濁流、魚とりは断念。29日同様、室内でスライドなど&お話。

が、参加者は29日とは違い、緊張感の持続しないお年頃のこめら。お話は30分ほどで切り上げ、会場周辺の田んぼと水路でドジョウなどを観察。そこで稲葉さんは貴重な水草を発見。こちらも盛り上がりました。

「次回は川で魚とりをしようね」と締めたら、「次回っていつ?!」と女の子。「来年の夏かな? よろしくね」と言ったのに……閉会后、稲葉さんたちは富沢で魚とり三昧。信じられない。和子さん、新国3姉妹、熊倉夫妻ら、カジカなどとりまくり、アカザまで。子どもに見られたらどう言い訳しよう……などと考える必要もないくらい、富沢は増水したまま、未就学児は流されるであろう激流。呆れられるだけだな、と思い直しました。

30日は、和子さん&新国3姉妹&聖子で、稲葉さんの追っかけをしました。それにしても、新国3姉妹はすごいです。勇さんの生きもの大好き英才教育が花開いています。稲葉さん&新国3姉妹、相互リスペクト。愉快です。(9/3・聖)

*9月20～21日、予定通り、**只見川上流ユビソヤナギ調査**に行って来ました。参加者は和子、孝之、聖子の3名。20日は金泉橋(国道352、福島・新潟県境)下流の只見川右岸(檜枝岐村砂子平)で19本確認。21日は前回6/27調査地(金泉橋上流)より上流を調査、喫茶「山人中」付近で1本確認。合計20本、No.2469まで。

ちなみに、前回調査は40本、内3本は新潟県側。今回は思ったよりも少なかったです。藪漕ぎと雨風がキツかった……。

21日は尾瀬・渋沢温泉小屋への登山口、小沢平付近とそこから県境付近までの国道沿

いを調べてみましたが、県境付近から下流にしかないようです。雨風に阻まれ、ちょっとしか調査できませんでしたが。県境付近の新潟側、今回の調査地よりも下流にはありそうな感じ。でも、アプローチが難しいので、私たちには無理。

20日は奥只見湖、銀山平付近の北ノ岐川(新潟県魚沼市)にまで足をのびしたところ、でんぱつ石抱観測所から下流、右岸に太くて立派なユビソヤナギが大量にありました。百本単位の予感。こちらは調査しやすそうなので、来年5月下旬にでも遊びがてら調査に行くかも。

今回調査したユビソヤナギは白っぽくて、伊南ののに似ています。付近にユキツバキらしきブッシュあり。標高約870m。周辺には立派なブナ多し。アケビ、ヤマブドウ、グミなどの実が食べ頃で、いかにもクマに会いそう。檜枝岐村中心部にはいないマムシがいるから気を付けろ、と言われたのですが、新潟県側に行く時、県境近くの道路脇にマムシが……対向車の人たちと一緒に車内から記念撮影しました。

ちなみに、銀山平付近のユビソヤナギは黒っぽくて、黒谷川似。オオバヤナギ(開花中)と半々くらいの林を形成。近くの尾瀬三郎商店で「山登り?」と聞かれたので「ヤナギ調査」と答えたら、ものすごく興味を持たれ、盛り上がりました、お店の人たちが。『会津学』や昭和村の菅家博昭さんの著書とか置いてある店で、ご主人が環境Gメンなんだそうです。(9/23・聖)

*「**バーダー**」という野鳥雑誌10月号(文一総合出版)に、**赤勘兵衛**という自然イラストレーターが描いたクロツグミ(雄)が掲載されました。これは、和子&聖子ペアがユビソ調査の折、檜枝岐村内で窓にぶつかって死んでいたものを発見、これが赤さんの手にわたり、今回の雑誌ですばらしい筆致で描かれたものです。ユビソ調査の副産物といえるでしょう。それだけネタがよかったのでしょうね。書店でぜひご覧ください。

なお、このような絵を集めた画集が偕成社から刊行されました。「鳥の形態図鑑」6,090円。高い本ですが、この今にも動き出しそうな死体描写はたまねー! これって、病的?! (9/24・勇)

*9月28日、福島虫の会の三田村敏正さんと同行させていただき、**只見の昆虫調査**いたしました。またまた、福島初確認らしいハネナガイナゴが捕獲されました。ネットで検索されると写真が見られますので、家の周りのイナゴ調べてみて、和子まで情報下さい、只見の分布域を調べてみたいと思います。特

徴はハネの長さが腹端を越える長さで細め、飛距離がビューンとイナゴより長いよ。三田村さん曰く、只見町は昆虫の宝庫か? と。本音虫嫌いの私、どうしちゃったのかな。虫探しまでやる気になってるみたい、皆様で協力下さいませ。(9/29・和)

*9月27日(土)、**第5回只見町公認自然ガイド・インストラクター養成講座**が開催され、その講師が**三田村敏正**さん(福島虫の会)と**佐藤洋司**さん(福島県野生動物研究会)で、只見の昆虫と哺乳類についてお勉強。ちなみに、洋司さんは学ぶ会会員。只見でクロホオヒゲコウモリを日本一たくさん発見した人。三田村さんはここ数年、南会津の虫を調べるようになったところ、新発見三昧! 8月2日、二軒在家区いきもの観察会(ML投稿済)での発見についても講義で触れられ、これからの発見三昧を思うと、興奮! その興奮の勢いで、講座の次の日、只見、駒止湿原、月田農園と、和子さんが三田村さんの追っかけをしたところ、またまた新発見! ということだそうです。和子さんだけ、ずる〜! みんなを誘ってよ〜。(9/30・聖)

*夕方、ワラ運びをしていたら、**ビンズイ**が飛び立ちました。毎年10月に入ると、畑や周辺の林で数羽単位で見られます。高い山や高原で繁殖する夏鳥ですが、只見は南の国に帰る中継地となっているようで、けっこうよく見られます。図鑑で見ると、タヒバリとよく似ています。飛ぶとき、必ずツイーッと鳴くので見つけやすい鳥です。この声を聞くと、秋がきたなーとしみじみ実感します。いまが見頃。そう見られる鳥ではないので、ぜひご覧ください。(10/4・勇)

*今年の**新企画・キノコ勉強会**は、秋晴れに恵まれ入叶津のキノコ収穫ゼロにも関わらず、参加者9名の満足度100%だったかな? それぞれの楽しみ方のようで、写真撮りや栗拾いに、アケビめつけ、ダイヤモンド草やシラヒゲ草の花盛りで、沢沿いの散歩は充実しました。それにしても、キノコの出具合は予想がつかぬらしい。採集するのは毒キノコらしきもの多く、まずそうだし、本をみても、さっぱりわからずあきらめで終了。

昼食の、八十里庵(ガイド弘さん手打ち)の蕎麦うまかったな、季節メニューで1,000円、臨席と違う内容でも文句言わぬ事、お急ぎの方はできませんなど、かなり気まぐれ店長だが、ご試食の価値あります。多忙な中ガイドありがとうございました。

午後から、巨木塩沢のぶなを計測してきました。計測中、左右から聞こえる不気味な低音の音に耳を澄まし、さては魃魃魃か、熊か

とビビリながらも（カモシカかもしれない）巨木の勇姿にしばし見惚れて、さてこれは、森の神とでも名付けようか?などで盛り上がりました、(10/5・和)

* 今日、午前10時ころ、只見の大鎚山でキノコ採りをしていたS氏がクマに襲われました。いきなり来たということですが、キノコ探しをしていたので、クマに気づかず接近してやられたのかなと思われます。ちなみに子クマだった模様。S氏は30年来の只見通。クマは遭遇したことはあるものの襲われたのは初めて。みなさん秋の山は音を立ててにぎやかに歩きましょう。(10/13・勇)

* **八王子神社の大杉**／只見町の巨樹・巨木番付の東前頭2番目、横綱から6番目に数えられている、大倉の八王子神社の大杉が、昨夜から燃え続けています。今日の午前中に現場検証があり原因究明の模様。大倉の風景の一部である一本杉だけに、とても残念です。樹木の内側から燃えたため現時点ではまだスックと立っていますが、今朝がたから火が外にも出始めたとの情報があり、倒れる可能性も出てきました。万一倒れずに鎮火したとしても伐採することになりそうです。昨夜は徹夜で消防団が見守っています。いま、大倉の宝物・只見町の宝物が一つ消え去ろうとしています。／／只見町大倉の大杉は、さきほど11時すぎに、力尽きて倒れました。私が火災を知ったのは昨夜8時半頃でしたから、なんと14時間半も燃えながら立ち続けたことになります。樹齢何年だったか、ご存じの方教えてください。窓からの風景に穴があいたような感じです。(10/22・潤)

* 只見の自然に学ぶ会の皆様、こん〇〇わ。サポート会員のkurikin（くりはら）です。私の今年15回目の南会津行き（34泊目）は今週末の〈只見・紅葉ブナ林の旅〉になります。いつもはサイクリングでお邪魔していますが、今回はウォーキング・散策のスローな旅です。土曜日に私は初めての「癒しの森」散策、日曜は草一さんの案内で浅草岳方面の予定です。
〈南会津サポートクラブ〉の企画・募集で19名の参加で歩く予定です。毎回大好評のこのツアーですが、何かアドバイスやブナの森での楽しみ方などありましたらお知らせいただけたらと思い投稿させて頂いています。〈どんなに私たちが南会津が好きか〉これを伝えたいのです。(10/22・kurikin)
南会津サポートクラブ <http://homepage2.nifty.com/minamiaizu/>

* **書籍紹介** 英語の本ですが、とても感動したのでご紹介します。
タイトル/Food Chain Frenzy
シリーズ/The Magic School Bus A Science Chapter Books #17

ISBN/0-439-56050-0 著者/Joanna Cole
イラスト/Bruce Degen 出版社/Scholastic
ネイティブ児童向けの科学書です。小学校の生徒たちが、先生の運転するマジックスクールバスに乗って冒険に出発。そこで科学の様々なことを学んでいくシリーズです。この本のタイトルは「食物連鎖」ですが、食物連鎖だけではなく、生態系、さらにはその中での人間の位置づけまで明確に理解できる内容です。その明快さで、これまで私自身、人間をどう位置づけるのか薄ぼんやりしていましたが、読んですっきりと目から鱗が落ちました。これが児童用の本ですから感心します。小学生の時からこういう本を読んで学習していたら、大人になってからの生態系を考える意識もだいぶ違ってくるだろうなあと思いました。なお、同じ内容で大版の絵本になっているシリーズもあり、そちらは何冊か日本語の大型本としても出版されています。残念ながら食物連鎖、あるいは生態系に関するものはありませんが。(11/11・潤)

* **恵みの森ツアー**をありがとう／お礼が遅くなりましたが、11月9日の恵みの森ツアーの企画と当日のご案内ありがとうございました。只見に転居してからずーと気になっていました。今回のツアーで森の様子が判りましたので、色々な季節に再訪してみたいとおもいます。これからも、このような企画をよろしくお願いします。(11/11杉沢・田中)

* 9日は**彦衛さんガイド**で恵みの森に行ってきました(10名参加)。今年最後になるかもしれない名残り紅葉のせいか、他にもガイド付き2グループと個人数人に会いました。彩り豊かな落ち葉が沢の淀みに溜まり、思わず深みにはまる人あり、みーさんが木葉化石を発見し森の分校に寄贈、帰路は新道の尾根道で落ち葉踏みしめ登山気分。1時頃やつとこさ昼食にありつきまして、村のおばちゃん手打ち新そば定食これまたうまかったです。おみやげに彦衛さん手作りの、すりこぎ棒を全員でいただきました感謝。(11/14・和)

* **ユビソのこと**／今日の読売新聞福島版にユビソヤナギの伐採記事がのりました。伐採を計画したが、白紙にもどすという内容です。指摘した保護団体として、野鳥の会南会津支部。ユビソを調査しているグループとして学ぶ会のことがでています。どちらも実名はふせてあります。今回の報道で気をつけてほしかったのは、自然保護団体がいうから計画中止となったという図式にならないようにすること。要望があったから簡単に切ってしまうという発想はよくありません。保護団体が悪者呼ばわりされ、彼らのために事業ができないと簡単に報道されては困ります。大事なことは、世界中でどこしかないユビソヤナギの保全をどのように考えるかということです。そして水辺の生物たちが長く暮らせるた

めにはなにが大切なのかということ。水辺林のこと、ユビソヤナギのことをもっともっと身近に知ってもらわなければと思った次第です。(11/23・勇)

* 昨日の**読売福島記事**、ネットで見られます。(11/26・聖)

絶滅危惧種ユビソヤナギ 自生地で伐採計画／伊南川流域 県、現地確認せず
<http://www.yomiuri.co.jp:80/e-japan/fukushima/news/20081123-OYT8T00005.htm>

* **塩沢のハクチョウ**が51羽となりました。内訳は、オオハクチョウ13羽、コハクチョウ38羽です。念を押しておきますが、泥の中に首を突っ込んでるのは、決してひもじいからではなく、植物の根を食べているのです。本来の食性です。人工的なエサより、自然であり安全です。ここは人に慣れていない自然状態のハクチョウが見られる貴重な飛来地といえます。(12/17・勇)

* **謹賀新年**／会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。只見には、程よい雪で、スキー場の積雪も遊べるくらいあり、新年の太陽も只今、雲の間から見えております。今年もみなさまと、健康で自然の中で、思いやり遊びましょう。(1/1・和)

* 皆さま、明けましておめでとうございます。昨日毘沙沢に戻りました。林道を歩いている時に空からの視線。**この鳥は?**今年もよろしくお願いします。(1/7 工房毘沙沢・今井)



* はい、みごとな**クマタカ**の成鳥です。翼が厚くて、後方が大きくなるんですね。翼の先の鷹班模様もばっちりです。いいところにお住まいですね。(1/7・勇)

* 本日の**水鳥観察会の結果**は、次のとおりです。
(滝湖) オオクチョウ12・コハクチョウ12・マガモ79・カルガモ20・コガモ118・ホシハジロ43・キンクロハジロ39・カワアイサ4／計8種327羽
(只見湖) マガモ20・カルガモ98・コガモ11・ヒドリガモ17・ホシハジロ193・キンクロハジロ115・ホオジロガモ1・カワアイサ1／計8種456羽
今年は種類、飛来数とも少なめ。参加者は15名。最後に、只見湖わきの山で大きなカモシカ(タイトル写真)が見られたのが収穫でした。(1/12・勇)